



公立高等学校で行われた助産師による性教育の実際

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 工藤, 里香, 古山, 美穂, 森川, 香織, 井端, 美奈子, 大平, 光子, 町浦, 美智子, 末原, 紀美代 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010782

報 告

公立高等学校で行われた助産師による性教育の実際

工藤 里香・古山 美穂・森川 香織・

井端美奈子・大平 光子・町浦美智子・末原紀美代

Report on sexuality education by Midwives at a public high school

Rika KUDO, Miho FURUYAMA, Kaori MORIKAWA,

Minako IBATA, Mitsuko Ohira, Michiko Machiura And Kimiyo SUEHARA

Key words: sexuality education, high school, health education, condoms

I. はじめに

現在の日本では、高校3年生の性経験が4割前後、大学4年生では7～8割にも達していることが、各地の性教育研究会の調査で明らかにされている。思春期に限らず成熟期においても、安易に性行動に走る、健康を害する行動をとるといった行為が多々みられている。近年増加している性感染症や人工妊娠中絶はその結果のひとつであると考えられる。

思春期は、自分の身体を認識し、性を受け入れ、自分をコントロールする能力を身につける大切な時期である。この時期に自分のからだは自分で守り、適切な保健行動がとれるように、性に関する健康教育を行うことが必要である¹⁾。

大阪府立看護大学看護学部母性看護学・助産学の教員は、大阪府下某公立高等学校（以下A高等学校とする）のロングホームルームにおいて、年1回、性教育「生と性の授業」を平成14年度から行っている。授業の運営は、教員と大学院生で担当している。

本稿では、助産師の行う性教育の内容、高等学校との連携・調整などについて、平成15年度の授業実践を中心にまとめた。

II. 授業実施までの経緯

A高等学校での性教育の取組みはほとんどなされておらず、女子生徒の妊娠や出産、人工妊娠中絶、男子生徒も女子生徒も育児をしながら学業を継続させているなどの実態があった。「このままではいけない」という養護教諭の思いが「性教育」に取り組む発端となった。養護教諭一人ではその任が重く、大きすぎることもあって、本学へ相談が持ち込まれた。

平成13年度には、本来望ましい形態ではないが、学年一斉に望まない妊娠予防と性感染症予防に関する講演を行った。そこでは性知識の伝達のみにとどまらず、自作した映像教材を用い、生命の誕生とその確率、月経周期を記録にとどめる必要性、避妊方法と性感染症予防は全く異なること、愛を育てることと子どもをすることは別のこと、自分を大切に、そして相手を大切にすることなどを、一時間にわたり話をした。

しかし、集団での授業は生徒への浸透が充分でないことから、生徒の心に身近に寄り添い、生活に密着した性知識の伝達方法としてクラス単位の性教育を提案した。平成14年度、15年度の2回にわたり、「生と性の授業」を実施した。

III. 実施する助産師の価値観の共有

筆者らの性教育は、坂谷²⁾の示す「生命と直

結し、自己の存在に深く関係する生命尊厳の科学である」「性の健康の保持、増進や性的問題解決のエンパワーメントを養う」などの「生と性の学習についての考え」に基づいて実施している。

A高等学校で授業を行うと決定した際は、さらに「助産師が行う性教育の意義は何か？」について話し合い、それを授業のテーマとすることとした。話し合いの中で、性教育は性感染症や避妊法についての知識のみを伝えるのではなく、高校生に認識して欲しい事項を伝える必要があるという共通認識を得た。避妊や性感染症の予防をなぜ実行できないのかを考えることで、認識して欲しい事項として1. 自分の命は大切なものであること、2. 自分と同じように他人を大切にしたい、という2点であるという、共通の認識を持った。また性行為を行う際の条件として重要なものに「自分の人生設計を考える」ということがある。高校生が妊娠し、出産すると、高校生としての生活が営めなくなることが多いため、妊娠する可能性のある性行為は行わない、というNO SEXの考えを持つことが望ましいということを共有した。これらよりテーマを1. 命の大切さを伝える、2. 自分や他人を大切にすることを伝える、3. NO SEX、と決定した。しかし、高校生の中で人工妊娠中絶術、性感染症が増加している現状をふまえる必要もあり、望まない妊娠を避けるための方法や安全な性行為についても伝えることとした。

IV. 学校関係者との価値観の共有に向けて

養護教諭はまず「助産師という専門家が来る安心感」という思いはあったが、「妊娠をしないためのHow to」といった内容を要望していた。平成14年度は、助産師が性教育を行う意義や実施者の価値観や信念などを数回の時間をかけて、養護教諭を含む教諭4名の保健部会で説明した。また文部科学省と厚生労働省の指針を確認し、助産師が行う性教育の主旨の理解を得、授業を実施した。その結果、直接打ち合わせをした教諭の理解は得られたが、直接対話をしていない各クラス担任教諭からは、「教育の専門家ではない」「教科科目の教授方法とは異なるの

で、深みがないのは仕方がないと思った」という意見があった。

平成15年度はこの反省を生かし、授業実施の約2週間前、各クラス担任教諭と学年主任教諭からなる担任団と保健部会、大学の代表4名の合計14名で打合会を開催した。その中で、助産師という生命の誕生に関わる現場に接してきた者が伝えられる「生と性」とは何か、学校関係者ではない外部の者が生徒に接すること、つまり評価されない授業のメリットについて討論した。また「教育の専門家ではない」というデメリットを克服するために、欠席者や退学者などの各クラスの状況や、この授業の内容に対して興味・知識の有無、外部から来た人間に対してオープンになれる生徒・緊張の高い生徒、雰囲気盛り上げられる生徒など、授業の進行に参考になる生徒たちの特徴の情報を得た。これらの試みにより、助産師が行う性教育の内容の事前理解を得、生徒の授業への参加を促してもらうことができた。

V. 生徒・保護者のニーズ・レディネスの把握と啓発

生徒に対しては、授業実施前後に、無記名、自記式アンケートを実施し、授業内容について知らせると同時に、セクシュアリティの考え方や授業への希望や反応を把握した。

生と性の学習は、家庭での学びも非常に重要である。海外における性教育実践では、保護者の承認に重点を置いているが、我が国ではその重要性の認識度が低い。A高等学校も同様であり、保護者への性教育に対する考え方の把握と実施する性教育の内容周知のため、授業実施前アンケートを実施した。

その結果、是非実施してほしい、必要なものであるという肯定的な意見であった。また家庭では実施できていない状況であることが浮き彫りになった。

倫理的配慮として、授業前後の自記式アンケートと授業後の感想文は、個人が特定できないように無記名で実施した。得られた情報に関しては、データ化して学校へ返却した。また得られた情報を研究・教育に使用することをアンケートには明記し、感想文に関しては口頭で説

明した。

VI. 授業の構成と使用教材

授業は、ロングホームルームの時間（45分のクラスを2コマ）を使用し、6クラス毎に講師が担当し、同時進行で一斉に行った。アシスタントとして、助産学選択の学生と将来養護教諭を希望する学生計12名も授業に参加した。

授業の構成は、1. 恋愛についての価値観に個人差があること、2. 男女の性のとらえ方が違うこと、3. 相手を大切にすることはどういうことか、4. 助産師として経験してきたこと、5. NO SEX, とした。そして事前アンケートで得られた「授業の中で聞きたいこと」の中からいくつかのトピックスをとりあげ説明をした。

使用教材は、「ラブ&ボディブック」「自然なペニスモデル」「コンドーム」「コンドーム使用ガイド」を用意した。コンドームの使用法の説明時は、使用方法の伝達だけにとどまらないように留意すること、命の大切さを考えてもらえるように各自工夫することを前提とした。

VII. 授業の実際

授業の実際は基本部分と、各クラスの状況や担当講師による自由裁量の部分とで構成した基本的内容は以下の通りである。

1) 生徒の出席確認

名前を呼びながら授業ができるように名札を用意した。また一人ずつ出席をとりながら名札を手渡した。

2) 自己紹介・導入

「助産師とは何をする人か」との問いかけを行い、自分が助産師になった動機や、活動の中で印象に残っていることなどを話した。妊娠から出産までの話題では、ポップアップ絵本「生命の誕生」と新生児モデルを用いて出産の様子などを説明した。

3) 男女共に性教育を受ける利点

自分のことを知り、自分を大切にし、自分を好きになってほしいためであることを強調した。加えて、相手のことを知り、相手を大切にすることを考えていくために、一緒に教育を受

ける意味がある説明した。

4) 命の大切さ

助産師としての講師の価値観も含めて伝えた。生まれてきたことはすばらしいことで、自分の命や人生を大切にすることや自分で自分の人生をどう過ごしたいのか考えることが重要だと伝えた。また子育ての大変さを説明し、現在の高校生という自分に子育てが可能かと問いかけ、交際は「NO SEX」が望ましいと説明した。

5) 「NO SEX」について

妊娠しないための避妊法という考えよりも、まだ高校生は性行為を急がなくてもいいという「NO SEX」の考えがふさわしいと伝えた。理由としてお互いを大事に思う心が「NO SEX」につながり、自制するという気持ちが相手への思いやりになると説明した。また、SEXを経験したカップルであっても、困難は伴うが自制が相手への思いやりになることを互いに納得することで、今からでも「NO SEX」のおつきあいに変化させていくこともできると説明した。

6) 自慰行為について

性の自己コントロールや自分の身体を知るために、自慰行為をすることは正常であると説明した。

7) ネゴシエイトについて

自分の気持ちをどのように相手に伝え、良い関係を築くか（ネゴシエイト）について考えるため、1つの例をアシスタントや担任教諭により実演した。

8) SAFER SEXについて

自分の身体は自分で守るというSAFER SEXの考えのもと、人任せにせず、正しい知識を得ることや相手に言葉で伝えることで危険な行為を回避することの重要性を伝えた。

9) 避妊について

避妊とは望まない妊娠を避け、女性が主体的に実施できることが重要である。そのため女性も男性用コンドームを確実に使用できることが大切であると説明した。

10) コンドームの装着演習

コンドームの開封から生徒全員が行い、正しい装着方法を実施し、確実な知識を説明した。留意したことは、積極的ではない生徒には無理にコンドームを開封させないということである。

11) 事前アンケートへの返答

身体的側面では、男子は「股間（ペニス）が小さいこと」と回答している生徒がいた。セックスには心が大切で、乳房やペニスの大小は関係ないと説明した。

精神的側面では、「うつ病について話してほしい、いじめはいじめられるほうが悪いのか」という質問があった。これらについては、自分を大切にす、相手を大切にすという視点からアプローチし、話を展開した。

「性同一性障害について」は、自分の身体的性と自己認識の性に差があることは異常ではないことやこのことに関しては個人差があることを説明した。

12) アシスタントの役割

アシスタントは新生児モデルの抱き方を提示し、ネゴシエイトや自然なペニスモデルを用いてのコンドーム装着のデモンストレーションなどの役割を担った。さらに高校生にとって身近なモデルとしての役割を果たし、その結果今何をしているのか、将来どのような職に就こうとしているのか、男女のおつきあいについてなど高校生から興味を持って質問があった。

VIII. 授業後の評価

生徒達より、今回の授業内容について「今は必要ないけど、いつか役に立つときが来るかもしれない。」「真剣に話してくれたからよくわかった。」「避妊は大切だ。」「つきあっていたらセックスはやるもんやと思っていただけ、断ることもたいせつなんやなぁ〜」という意見があった。

アシスタントの参加は好評で、感想文にもアシスタントへの応援のメッセージが述べられていた。

学校関係者からの評価は、肯定的な意見がほとんどだった。一方で、このような教育の必要性はわかるが、自分ではできない、受け入れられない、といった意見もあった。

このようにセクシュアリティに対する考え方は非常に幅があり、十分な説明を行っても理解を得られないことも多い。しかし、学校関係者や保護者と共通理解・共通認識を持つことによって、学校での性教育は発展していく。

性教育バッシングが大きな問題になっている昨今、性教育の授業に関する学校関係者と保護者との調整は、重要で必要不可欠なものであることが、今回の経験より浮き彫りになった。

IV. おわりに

高校生への学外者の関わりには限界があり、継続して深く関わる役割の中心は、やはり教諭や保護者である。教諭から「これが実際にどれだけの効果があるか、これからの課題だろう」との投げかけがあったことは、その責任の所在は学校の教諭にあるということを示している。性教育や人間教育は日常の生活の中にあることからこのような教育のリーダーシップが保護者と教諭にあることは否めない。

日々の教育への刺激や充実の1つとして、助産師をツールとして活用してもらうことは、より良い性教育を共に作り上げていくことにつながると考える。

この取り組みのフォローアップとして、生徒のからだ・こころ・性などの様々な問題への対応と問題解決へのエンパワーメントを目的に、担当者を決め、筆者らが中心となり、毎月一回保健相談会を行っている。学校関係者ともこの取り組みへの評価や今年度への課題について話し合いを継続している。

謝 辞

「生と性の授業」の実施にあたり、ご協力していただいた大学院生、浅野浩子さん、松浦和枝さん、須古星千里さん、中西伸子さん、学部生の皆様に、お礼を申し上げます。

文 献

- 1) 森恵美編, 母性看護学概論, 医学書院, 2004
- 2) 坂谷理恵子, 「生と性の学習会」のめざすものとワークショップの実際, 助産婦雑誌, 55(8), 701-705, 2001